



ハンドのラツパ

田中 忠雄

私が初めてハンドボールというものを見たのは中学三年の時テレビで室内大会の決勝戦、明大対日体大の試合だった。その試合でサイドから飛び込んで空中でパスをたたきこんだ人の姿を今でも思い出す。私が高校に入學しハンドボールに入ったのは夏休みの練習からだった。何だか不安な気持ちでいた私をときほぐしてくれたのは渡辺さんだった。今から考えてみると私は丁度高津ハンドボールの第一期黄金時代の頂点の時に入りなれたか一緒に山をおりてしまつたような気がする。私の入った時同学年の人では松倉君、前田君、奥田君、谷広君等がいて山口君は首腸とかで休んでいた時だった。その夏休みの終りに団体予選があり私が最初に我チームの試合を見たのは豊中高校だった。第一戦はたしが泉大津だったと思う。その時、前半後半半分ずつに谷広君と共に出してもらった。その時の気持

は情ない事だが、ただ皆にしかられるような失敗だけはしないようにという気持だった。この予選は三年から西原さんや浅のさんも出ていたとき、八尾高校での決勝戦、対桜塚戦まで進んだ。勿論洋楽勝や決勝戦という重要な試合に出させてもらえなかった。今から考えてみて私の一番良かった記憶に残るのは一年の春の新人大会で決勝戦までいった事だった。あの時は練習している途中で雨が降り、止むと空に二重の虹がかかっていた。縁起がよいとたわいのない事を云ったりしたが、結果は日体予選と同じく桜塚に敗れ二位だった。私はバツクだったので一度は予選の様に点を入れてみたいと思っていた。私の夢は室内ハンドボールの時二点入れる事ができて果された。スポーツの強い弱いは「フワイト」と練習の一言に尽きる思う。バレーボールの日紡貝塚があれ程強いのも毎日バレーボールに明けくれする生活を送っているからだと思う。しかし私産学生は勉強もあることだから、その練習と勉強という事を調和させることを考えねばならない。と云つても二の高津では練習しすぎるなんていう事は決して起らないと思う。その点にいさゝか不満を覚えるが、これも自分の出番がすぎた次の入りに自分の泉せなかつたムリな夢を

要求しているかもしれない。

終り

夢中だった現役時代

林 毅

入学して一週間程立ち、中学時代少しかじった野球をやろうかなと考えていた矢先が、中学時代の先輩で「秀才」であった方々がハンドボール部におられたので「えらい人がやっただはるのやから、ええクラブやう」と思っ、入ってしまった。体力的には自信があったし、未知のスポーツに対する興味から張り切っていたのだが、うわさにたがわず練習は敷しく、毎日「無我夢中」で週していた。しかし、日が増すにつれて何に對しても自信がなくなってきた。それに加えて、生来の気の弱さも手伝って全く不安であった。特に今でも鮮明に思いだされるのは、六月頃（一年の時）雨で練習が休みになろうとしていた時、先輩、津田、櫻本両氏が来られ、柔道場で腕立ふせ五十五回余を含めた基礎練習をやった後、土砂降りの雨の中を全員ミランとならんで運動場を十回程走って、体のシンまで冷えさせてしまし、ぶる／＼震えながら家へ帰った。

と、夏季強化合宿のあの「元氣とみた」宣言に初まる猛練習、倒れた友人をあとにし、独特の感情、僕自身、ぶったおれたり、目の前がまっくらになり芝生の明る高台の木陰で頭に水をかけられたりした。全く新しい練習であつた。だが上級生の良きリードのもとに、何とかがんばつてついていった。おかげで、フオワードの一員として二度の優勝経験ができた。初優勝した当時、本當にうれしくて涙が出そうになったり、夜、決勝戦が思いだされて眠れなかつた。二年になり三年が引退して、それまで選手でいていた三人を除いて新しい陣容になった。我野、西条等が抜けたら高津もこれであかんやう」と他校のものにいわれたのには、主将であつた自分ばかりか他の部員も何クソとフアイトを燃した。同じ学年には、名キーパー増田君、攻守に活躍してくれた田中君、小さいながらバツクで奮闘、マネージャーをやつてくれた渡辺君、眼鏡をかいたクラブ一の秀才、森君、おしゃやれで足の走り植村君、フアイト満々の上島君、秀才の井口君や斉藤君、それに土田君などがいた。技術面の不足はチームワークで補おうと練習に励んだ。主将で無理なことはいつたが、皆黙つてついてきてくれた。ありが